

**天理大学ラグビー部 全国大学選手権 決勝進出****難波真理**

平成 24 年 1 月 8 日、穏やかな日差しが注ぐ国立競技場。全国大学選手権大会決勝は初優勝を狙う天理大学と、三連覇がかかる帝京大学との戦いとなった。大型フォワード (FW) を擁する帝京大学。一方、小柄ながら強烈で低く刺さるようなタックルを武器にバックス (BK) がボールを動かしていく天理大学。天理 FW が BK にかにかいい形でボールをつなげるかが勝敗の鍵を握っていた。観客も天理ラグビーの心躍らせる BK の展開を楽しみにしていた。試合が開始され、天理にボールが出ると国立競技場は大歓声につつまれた。

**天理ラグビーのはじまり**

大正 12 年、中山正善 2 代真柱は旧制大阪高等学校 (大阪高) に在学中、初めてラグビーと出会った。大阪高では部活動をしている生徒以外の一般の生徒も休み時間に楯円球を蹴って遊ぶなど大流行していた。全校生徒が体操の時間などにもよくラグビーをしていた。2 代真柱もその大柄なからだと高い運動能力を見込まれ、クラスマッチに出場し、素人離れた快走ぶりやハンドオフを見せるなど、ラグビーに親しんでおられた。

大正 13 年春、大阪高ラグビー部が旧制天理中学 (天理中学) の寄宿舎で合宿練習をおこなった。この時、郡山中出身の部員が 2 代真柱に「天理でもラグビーをやらないか」と持ちかけた。大阪高の部員が天理中学グラウンドで懸命に練習する姿を見て、ラグビー競技の持つ精神と動作に大いに興味を持っておられた 2 代真柱は「これならうちの学校でしてもよい」と考え、当時の天理中学、堀越儀郎教頭にラグビー部をつくるように頼んだ。

しばらくして養徳会の中に臨時ラグビー部ができ、大阪高のラグビー部員がコーチとしてやってきた。しかしながら手不足もあり、2 代真柱自らが手伝いに運動場に出ておられたようだ。

翌 14 年 7 月、堀越教頭が部長となり、天理中学ラグビー部が誕生した。

**天理大学ラグビー部のはじまり**

大正 14 年、天理大学の前身である天理外国語学校が開校した。1 週 2 時間の体育の時間にラグビーボールを追って十数名の学生達が蹴り合い、奪い合っていた。やがて、町田幸治、磯田義三郎、橋本武の 3 名が中心となってキック、パスワークの基本動作練習が始まった。

6 月に校友会が発会し、4 つの部が承認された。ラグビー部はそのうちのひとつとして正式に誕生した。天理大学創設者でもある 2 代真柱は天理中学、天理外国語にラグビー部が誕生したことを殊のほか喜んでおられたようだ。

部の創設から間もなく、2 代真柱はジャージー、パンツ、ストッキング 15 組とシルコックのラグビーボールを寄贈した。ジャージーは、中学校は純白、語学校は純黒とされ、それぞれ他の色で天理のマークをつけるようになった。

2 代真柱はこの純黒のジャージーをラグビーの強豪国、ニュージーランド代表オールブラックスのジャージーと重ね合わせ、たいそうお気に入りであったそうである。

**天理ラグビーのつながり**

今年度のチームは昨年以上に実力を備えたチームとなった。その原動力となったのは、子供の頃から“天理ラグビー”に親

しんできた選手たちであった。

天理には幼少期のラグビースクールから、中学、高校、大学、成人、高齢者までラグビーを楽しむことができる環境がある。「この縦のつながりを改めて生かし、天理の中で選手たちを育てていこう。」そう考えた当時の指導陣は、天理大学・小松節夫監督を中心に、天理高校・武田裕之監督、天理中学・関口満雄、渡辺徹両監督が連携し、天理高校第二部、天理教校学園も一緒に練習するなど、管内での育成を始めた。高校ラグビー界では、優秀な選手は高校を卒業すると関東の大学に進学するケースが非常に多い。関係者にとっては、もちろん関東に行って、活躍してくれることも非常に嬉しい。しかし、天理で育った優秀な選手たちを天理大学に送り、天理ラグビーの中心となって活躍する選手になってほしいという強い願いもあった。

その連携した育成の成果が昨年度のチームに現れる。天理大学前年度主将の立川直道の世代から育成を始め、その選手たちが昨年の関西 A リーグで優勝を果たす。今年度の主将、立川理道は全国高校大会で活躍し、多くの有名大学から声がかかったが、天理大学へ進学することを決めた。その立川と一緒に成長してきた選手たちは、立川と天理ラグビーを広めるために天理大学へ進学しようと共に進学してきた。実際に、決勝戦の出場メンバー 22 名中、約半数が天理ラグビーの中で育ってきた選手たちである。今年度の活躍は、まさに、天理ラグビーの連携が取れた指導の成果であると言っても過言ではないだろう。

サポーターも素晴らしかった。スタンドで応援をする人々の姿は保護者ばかりではない。今はラグビーをしていなくても、幼い頃とともに練習してきた友人やその家族が我がことのように声援を送っている。「あの時の、あの子がかんばっているやん！」という声が多く聞かれた。そういった周りとのつながりも天理ラグビーの魅力であり、力であろう。

天理ラグビークラブは日本ラグビーフットボール協会から、一定の条件を満たし、地域における 7 人制ラグビーの普及、強化に協力するクラブとして「セブンズブロックアカデミー」パートナークラブとして昨年 5 月に認定された。天理ラグビーは幼少から高齢者まで、学校を含めた育成ができることに大きな特徴があり、期待されている。この特徴を生かし、見ている人を魅了する天理ラグビーを全国に広げていって欲しいと願っている。

大学選手権大会決勝では準優勝に終わったものの、天理大学のラグビーは確実に日本全国のラグビーファンを魅了した。小さな FW 陣が大きな相手に耐え、BK 陣にボールを供給する。時にはボールを持って走り、前へ進む。同点トライを引き寄せたロック田村玲一のからだを回転させながらの突進は素晴らしいものであった。スタンドオフ立川理道がボールを持つと大会随一の BK 陣が躍動する。天理の BK は何をしてくれるのか。国立のスタンドは期待を込めて大きな歓声が起る。パスワーク、スピード。見る者誰もがその展開ラグビーに魅了された。

今年度の天理大学ラグビー部はここで終わらない。2 月 25 日から始まる日本選手権への出場権を得た。あの FW、BK が一体となった展開ラグビーをまだ見ることができる。

社会人相手の試合に、「あたってください。大学生らしい試合をしたい。」小松監督が語ってくれた。今からその時が待ちどおしい。

ソウルでの東亜宗教学術 FORUM に参加・発表

金子 昭

1月6日、7日の2日間にわたり、韓国のソウルにある円光大学ソウル事務所で、東亜宗教学術 FORUM (日韓宗教研究 FORUM2011 年度研究報告会) が開催された。テーマは「無縁社会と宗教者の役割：日韓の状況」で、日韓の宗教研究者5名が研究報告を行い、それに基づいて討議が行われた。このテーマは、私もメンバーとして関わっている科研費による基盤研究(C)「無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究」(研究代表：宮本要太郎・関西大学教授)の中間発表もかねて設定されたものである。参加者は日本側8名、韓国側9名の計17名。本学からは、人間学部の神田秀雄教授と私が参加した。

発表者とその題目は次の通り。

中西尋子 (関西学院大)：在日韓国人社会における在日大韓基督教会の役割

申 光澈 (韓国・韓神大)：多文化社会における宗教

白波瀬達也 (大阪市立大)：最貧困地域における宗教者の支援活動—大阪・釜ヶ崎を事例に

李 元範 (韓国・東西大)：無縁社会と宗教文化交流—韓国両国の宗教社会における同質性と異質性—

金子 昭 (天理大)：“無縁”を“有縁”化する仏教ヒューマニズムの展開—東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動を通じて—

総合討議では、韓国側から韓神大学の柳誠旻教授、日本側から金光教羽曳野教会の渡辺順一会長がそれぞれコメントを行った。

「無縁社会」とは、「人と人とのつながりが希薄になった結果、お互いを“無縁”とみなしてしまう社会」のことである。「無縁社会」という言葉そのものは、現在のところ、日本においてのみ通用しているものだが、これが意味する状況は日韓に共通する社会現象である。今回の研究報告会では、とくに国籍(あるいは国境)を超え、縁が断ち切れて寄り添なき状態になった人々を、宗教者がさまざまな形で救援・支援している状況が紹介され、また、そのあり方をめぐって活発な意見交換が行われた。

日本側の発表では、中西氏が在日韓国人へのキリスト教(大韓基督教会)の関わりにおける世代間の相違について触れ、一方、白波瀬氏はホームレス伝道を行っている「布教型キリスト教」の事例として韓国系プロテスタント教会の活動を紹介した。また私(金子)は、東日本大震災における台湾の仏教団体(慈済基金会)の大規模救援について、6月に取材した結果などを元に調査報告を行った。

韓国側の発表では、申氏は韓国で近年増加している移民(主に中国や東南アジア)へのキリスト教や仏教の支援システムとその実際及びその問題点について報告し、李氏は昨年末に日韓で同時刊行された『越境する日韓宗教文化』(北海道大学出版)の紹介を通じて、両国の宗教が国境を超えて絶え間なく流入し、拡大し受容されてきた状況について、その分析を行った。

意見交換においては、同じキリスト教でも、カトリックは多民族型の教会になるのに対して、プロテスタントは民族別教会を形成する傾向が日韓に共通してあること、また韓国固有の間

題として、同じ民族でありながら全く異なった政治的・文化的環境で育った北朝鮮からの脱北者への支援も、多文化社会教育のプログラムに入れて考える必要があることなど、種々の興味深い知見が得られた。

なお、この東亜宗教学術 FORUM は、現在、諸般の事情で休止状態にある東アジア宗教文化学会の再開に向けて開催されたという意味もあり、研究報告会とともに運営委員会も開かれ、韓日宗教学術交流の中国語圏への拡大、及び次年度の研究報告会の開催について討議が行われた。



東亜宗教学術 FORUM 会場 (円光大学ソウル事務所) にて

第 244 回研究報告会

12月22日、金子珠理所員が「家事労働をめぐる近年の動向と「梅棹家庭学」と題して発表した。先ず、2011年6月にILOが第100回年次総会において採択した、第189号条約「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」の意義が解説され、その上で、日本における条約の適用可能性について、介護労働者の労働実態に焦点を絞って考察が行われた(『グローバル天理』本号の連載「現代ジェンダー論展望」も参照)。

後半は、こうした家事労働者の問題を、女性学の主要テーマの一つである「主婦論争」の文脈から捉え返す試みであった。特に、第1次主婦論争(1955～1959年)において、梅棹忠夫氏は文明論やテクノロジーの視点から、主婦役割を全面的に否定する独自の主婦論を展開し、当時孤立したが、半世紀後の今日、梅棹論をいかに評価し批判すべきか、検討が加えられた。またテクノロジーの進展と市場化により家事は軽減されるという梅棹氏の予測は当たったのか否か、さらに日本は今後、外国人の移住家事労働者を受け入れる方向に進むのかどうか等が議論された。

(9頁からの続き)

軍隊や国家警察に対しても攻撃を仕掛けている。その理由は、彼らは「キリスト教徒を守っている」からだという。ナイジェリアのある国会議員は「テロリストに対する戦いに敗れたら、国は崩壊してしまうだろう」と言っている。

ボコ・ハラムの報道官アブドゥル・カダ (Abdul Qada) は、ナイジェリア北部のキリスト教徒に対して「3日以内に退去せよ。さもなければ皆殺しにする。」と最後通告を発した。幸いに今もって、最後通告が実行されたという報はないが、2012年の元旦のアンジェリスで、ローマ法王はテロ行為を即座に停止するように訴えた。

教祖のご在世当時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』においての教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰の世界の一端を明らかにしたいと思います。

本講座は、平成24年および平成25年の2カ年間、4月から11月(7月を除く)の毎月25日、午後1時から2時45分にかけて、道友社6階ホールで開催を予定しています。

平成24年度については、以下の内容で実施いたします。

4月25日(水)	7	「真心の御供」	深谷忠一
5月25日(金)	25	「七十五日の断食」	堀内みどり
6月25日(月)	10	「えらい遠廻りをして」	澤井義次
8月25日(土)	2	「お言葉のある毎に」	幡鎌一弘
9月25日(火)	11	「神が引き寄せた」	八木三郎
10月25日(木)	31	「天の定規」	澤井義則
11月25日(日)	22	「おふでさき御執筆」	安井幹夫

## 連載執筆のねらい

「襲のあわいに深く入り込んでいって…」をめぐって  
松田健三郎(天理大学人間学部宗教学科教授、哲学)

メルロ＝ポンティを述懐して、鷲田清一は、その「精密な思考、高度に研ぎ澄まされた思考が哲学の最初の魅力なのだが…」という。そして、ことばをつぐ。

…どこか言いようのない寂しさ、あるいは控えめに滲みでてくる断念のようなものがその文章から感じられないような哲学というものも、信用できないというところが哲学にはある。

メルロ＝ポンティ自身、同様の言辞をものしている。

<明証性>に対する眼と、<両義性>に対する感覚…もつとも、…両義性を受動的に受け取るだけであれば、その両義性は<あいまい>と呼ばれる。しかし、もつとも偉大な人たちにあっては、両義性は主題となるのであり、確実性をおびやかすどころか、その確立に寄与する。

いささか情緒過多とおもえましょう、鷲田のさきのことばの鋭く錘鉛し、永遠に失われたものでもあるかのように、いやむしろ、それとして屹立するところである。そう、「襲のあわいに深く入り込んでいって…」とよりいいようなない竟位——遙けくも望んでみたいではないか、その可能はともかく、幾重もの意味でわれを忘れて…

現代世界に生きる「人間」と「宗教」

岡田正彦

「われ」とは何者か。

一瞬先も見通すことのできない存在状況に置かれた人間は、その不確定性の故に世界に開かれた自由を享受するとともに、反面逃れがたい不安に直面せざるを得ない存在でもある。ここに人間という存在が、宗教をふくむ広大な意味体系を必要とす

る理由がある。

しかし、現代における人間の意味世界は、かつてないほどに直接的な現実経験と乖離し、人々は直接の体験よりもシミュレーションのなかに、より「現実的」なりアリティを感じるようになってきている。このような「世界」のなかで、「宗教」はいかなる存在意義を主張できるのか。

近・現代の世界に特徴的な旧来の世界像や人間観の根本的な転換を基軸にしながら、現代社会を論じる多彩な理論や視座を広く紹介し、現代に生きる人間の存在状況、すなわち「いま」・「ここ」に生きている自分自身について考え、今日の世界において何かを信じて生きることの意味について探求したい。

(from page 13)

conditions for domestic workers, who had not been recognized until now as “workers.” They were prone to receive scant attention because their workplace was in the private household, they were often made of migrant workers, and domestic work was regarded as merely an extension of “women’s work.” For such reason, the rights of domestic workers were often violated, and there were many complaints of lack of day off, failure to compensate for work, harassment, and sexual violence. Under the provisions of the EPA, Japan has begun to accept candidates for nurses and homecare providers from Indonesia and the Philippines; yet, in regard to migrant domestic workers, the situation in Japan is in condition of isolation from the rest of the world. The reality of the labor conditions for Japan’s homecare nurses may be in violation of the terms outlined by Standard No. 189.

Mari Namba — Tenri and Sports (21) Tenri Sports Symposium [11]

Discussion was held, with Aya Nakanishi added to the individual panels. The summary is as below:

Don’t wait for help from others; rather, take initiative to act on your own. An appeal can be made to society in general if both those with disabilities and those without disabilities take action on their own. Life’s joys and calling can be found by connecting with society through sports. Sports can become the bridge to join those with disabilities to the Japanese society, which continues to have many barriers. Thus, the future can be shaped.